

翁 暉

WENG Hui



無意識の律動 (The unconscious rhythm) / 「ある 1 日の手」/
「手がたくさんあったらいいな」

映像、投影/紙、インク/エポキシ樹脂、3D プリンティング

無意識の律動(The unconscious rhythm) / 「ある 1 日の手」/ 「手がたくさんあったらいいな」

世界に痕跡を残す行為を通じ、私は私自身に対する理解を深め、私自身を癒している。
その行為とは、何かを「指でこねる」というものだ。

私は常に手に触れる何かをつまんだり、こねたりしている。同じものを何度もこすったり触ったりする。緊張している時には、服の裾を執拗につまんでいるし、そうでない時でも、手と生地が触れ合えば、無意識に裾をつまんでいる。

そんな私の無意識の行為ひとつひとつに向き合いたい。心の中の無意識の欲求と衝動を引き出してみたい。

私は、私の無意識の行為のための手を欲している。なるべくたくさんの手があればいいなと思っている。

そこで私は、たくさんの手を持つ「私」を作った。6 点のドローイングと、6 点の 3D プリントによる立体作品が完全な私を取り戻してくれることを願っている。

また私は、ある 1 日における自分と他者の手の動きを撮影し続け、編集し、映像作品とした。

考え事をしているとき、階段をおりているとき、道を歩いているとき、買い物をしているとき、食事を取っているとき。とりたてて特別なことなどないある 1 日を、私たちが生きていたということを記した日記だ。

無意識な行為によってその日を生きている私と、もしかしたらそうした行為がなくても生きていける他者。両者を対比しながら、それでも、このように生きている私をどこまでも肯定する宣言でもある。

私は、自分の無意識的な体の動きは、自身の恒常性を保つための調整機構の一種であると考えている。このような身体の反復的な動きと、それが織り成していくリズムは、私の心臓の鼓動と同じく、生きていくために必要な律動だ。それは、私を守り、慰め、外部からの圧力や干渉に対抗する内なる力だ。私は、無意識の行為によって、私自身が生きていくためのスペースを確保している。そのスペースの内側で、私は起き、活動し、休息を取る。そのスペースの内側で、私は生きている。